

HIMALAYA

ヒマラヤ
No. 175



1986 JUNE

日本ヒマラヤ協会



THE HIMALAYAN ASSOCIATION OF JAPAN ——— HAJ

昭和61年度通常会員総会のお知らせ!!

日本ヒマラヤ協会昭和61年度通常会員総会を下記により開催いたします。

ご承知のように、総会は本会の最高意志決定機関でありますので、会員の皆様には万障繰り合せのうえ出席くださるようお願いいたします。

なお、やむを得ず欠席される場合は、定款の定めるところにより、委任状を必ず提出されるようお願いいたします。(委任状は、別途送付いたしました料金受取人払はがきをご利用ください。

5月15日までに必着するようお願いいたします。)

3. 議 事

- (1) 議案第1号 昭和60年度事業報告について
- (2) 議案第2号 昭和60年度収支決算について
- (3) 議案第3号 昭和61年度事業計画について
- (4) 議案第4号 昭和61年度収支予算について
- (5) 議案第5号 役員および評議員の一部補充について
- (6) 議案第6号 会員の除名について

4. その他

記

1. 日時 昭和61年5月24日(土)午後1時00分
2. 場所 大正セントラルホテル会議室
(東京都新宿区高田馬場1-27-7)
☎03-232-0101
(国電高田馬場駅前)

表紙写真

ルプガル・ヤズ氷河の源頭に聳えるルプガル・サールは、3つの7,000m峰からなる山塊である。モムヒル氷河側からは、この東峰がたえず眺められた。

(東京志岳会マラングッティ・サール登山隊)

ヒマラヤ No.175

1. **ヒマラヤ放談** ————— 趙 相 泰

4. ヒマラヤ・ニュース <地域ニュース・トピックス・インフォメーション>

6. 第1回北海道Exp. 研究会報告

8. TRANGO TOWER 6,251m

11. 二人だけの冬のマナスル ————— 斉藤安平

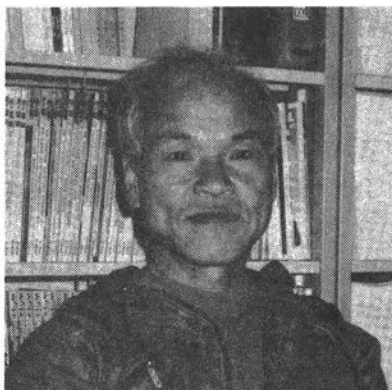
18. 中国登山の和文参考資料一覧

24. 寸感・事務局日誌

ヒマラヤ放談

去る2月12日、韓国からの客人をHAJルームに迎えた。ソウル特別市山岳連明理事の趙相泰(CHO Sang Tae)氏である。国を挙げての一大事業となった、今夏の韓国K2登山遠征隊のために、昨年のHAJ・K2隊の詳細を聞きに来られたのである。

今回のヒマラヤ放談は、その趙氏から、K2登山隊のこと、韓国の登山界のことなど、ざっくばらんに話していただいた。



趙 相泰

一大国家事業のK2登山

——遠路はるばるご苦労様です。趙さんご自身はK2隊に参加されるんですか？

趙 私は、もう歳ですから、体力的に無理です。ただ、ソウル山岳連盟の理事をしていますし、仕事も引退していて暇がありますので、こうして日本にやって来てK2隊のために情報を集めたり、装備を調達したりしているのです。

——今度のK2はかなり大がかりなものとお聞きしましたが。

趙 はい、隊員はほぼ確定していて、20名です。最近、アルパイン・スタイルに代表されるように、登山隊の小規模化が一般化しつつありますので、いまさらこのような大登山隊というのは時代遅れで、お恥かしいのですが、何しろ韓国政府が後援する全国組織の隊ですし、絶対に成功しなければならないということで、こんなに大きなものになりました。

キャンプ展開はこれまでの隊と同じで、ゴドウィン・オースチン氷河上5,200mにベース・キャンプを置いて、南東稜基部5,500mにA・B・C、さらに上部キャンプ5つを予定しています。酸素も使います。

——昨年、われわれのBCで韓国の偵察隊の方とお会いしました。10人行かれたんですね。

趙 あれは、実は第3次にあたるもので、本当にお恥かしいのですが、その前に第1次、2次と偵察隊がはいっています。ある人は、そんなに偵察に行くんなら登ってしまえばいいじゃないか、と言います。しかし、国の予算が、今年は第何次の偵察にいくら、来年はいくら、というふうに分けられるものですから。

——すごいですね。予算はかなりの額になるんでしょう？

趙 はい、日本円にしますと、億の単位でしょう。でも、お金はすべて政府がもちますので、隊員は登ることだけに専念すればよいのです。

——そうすると、隊員は多数の中から厳選された人たち、ということになるんですね。

趙 はい、今度のK2は、韓国の政府機関である体育部傘下の大韓山岳連盟が主催で、さらにその下に各道(日本の県にあたるもの)の山岳連盟があり、そこにそれぞれの地方の山岳会やクラブが加盟しているわけです。日本の日本山岳協会——各都道府県山岳連盟——各山岳団体というのと同じです。ソウルの場合は市ですが、韓国の人口約4千万のうち1千万が集まっているほど大き

い都市ですから、ソウル山岳連盟は他の各道の山岳連盟と同列で並んでいます。ソウル山岳連盟だけで500の加盟団体を持ち、私自身はそのうちの1つである岳友会というところに所属しています。K2の隊員はそういう全国の山岳団体からの選抜ですから、なかなか大変です。

大遠征隊には犠牲的精神が必要

——と言われますと？

趙 会と地域のバランスを考えなければならぬということです。全国民が注目していますから、特定の山岳会や地域から何人も、というわけにはいきません。いわゆる寄せ集めになります。そういう人たちは、所属する会や山岳連盟はもちろん、職場や地元の人たちの期待を集めているわけですから、どうしても自分が頂上に立つんだという野心が強く、協調性に欠けます。

そういう点では日本の人は立派ですね。日本隊のエベレストやK2の報告を読ませていただきましたが、20人も30人もいる隊員のうち頂上に立つのは2～3人という場合、自分が登頂隊員に選ばなくても荷上げやサポートをしっかりやりますね。縁の下の力持ちというんでしょうか、頂上へ登る実力がある人でも、隊長に命令されれば、登頂隊員のためにラッセルをしたり、荷上げをしたりということができるでしょう。大変すばらしいことです。心があたまの思いです。やはり、大きな隊を動かすにはそういう犠牲的精神が必要だと思います。

——いや、現在は日本でも同じです。以前は縦の関係が強い隊が多かったのもういったことがありましたけど、最近は登る力のある人はみんな登ろうという考えが一般的ですよ。

社会的に認められる登山隊員

——選ばれた隊員の方たちは特別な訓練をされるんですか？

趙 はい、何度か訓練合宿をします。特に今回はいろいろな会から集まっていますので、隊としてのチーム力を高めるためにはお互いの和が必要になります。この冬は済州島でやりました。K2のための合宿は、今年の冬もおとしの冬もやり

ました。^{ソラ}雪岳山でした。そのときはまだ最終的な隊員が決まっていませんので、隊員選考を兼ねていました。

——隊員は負担金を払わなくていいんですか？

趙 はい、合宿費用も遠征費用も、すべて政府がもちます。それに、各隊員は、それぞれ勤めている職場から遠征期間中も給料が払われます。公務員はもちろん、民間企業に勤めている人もです。

——えーっ。羨ましいですね。山登りに対する理解が深いんですね。

趙 ちょうど、オリンピックの選手に選ばれたようなものです。喜んで送り出してくれます。そういう点では日本より恵まれていると思います。K2のように大きな遠征ではなく、小さなものに参加する場合でも、たいていの人是有給休暇がとれます。——韓国の人の感覚では、スポーツとしての登山の確固たる位置づけがあるんですね。海外登山遠征隊というと、いつもそうなんですか？

趙 はい。ほとんどスポンサーがついて、隊員に経済的な負担は一切かかりません。ただ、この冬にエベレストへ3隊、それぞれ南東稜、南西壁、西稜へ行きましたが、このうち2隊は、費用の半分をスポンサー、あとの半分は隊員負担でした。1人あたり300万ウォン（約30万円）です。こういうことはこれまではない珍しいことです。でも、これからはだんだんと個人負担金で行く隊もでてくるんじゃないかと思います。

海外登山の機会は少ない

——韓国の登山人口は多いのですか？

趙 いえ、先ほど申し上げましたように、山岳会のようなものは多いのですが、その90パーセントはハイキング・クラブといった方がよいもので、中には女性だけの会もあります。山登りに対する一般の人の関心は強いんですけどねえ。ハード・フリーとかアイス・クライミングをやる人もいますが、数は多くないですね。

——1984年に、ネパールを訪れる外国登山隊数は韓国が日本を抜いて一番多くなりましたね。

趙 そうですね。1979年から80年にかけて、私の所属する岳友会がヨーロッパの3大北壁を登りましてからは、毎年かなりの人がヒマラヤへ行く

ようになりましたね。3大北壁といっても、日本人は当時すでに冬期単独登攀をした人がいましたから、ずい分遅れていたわけですが……。昨年、登山のために海外へでかけた人は50人くらいでしょうか。ヨセミテへ行ってロック・クライミングをやった人たちもいますから、そういう人たちも含めてです。

韓国では自由に海外旅行にでられませんから、外国へ登山に行くには大韓山岳連盟の推薦状が必要です。これは、正確に言えば、韓国にはもう一つ文教部 — 日本でしたら文部省にあたるものです — の下部団体である韓国山岳協会というのがありまして、そこでも海外登山のための推薦状を発行しています。登山隊は、その所属している方に計画書を提出して審議を受け、問題がなければ推薦状がもらえます。

—— そうすると、誰でもヒマラヤへ行けるというわけではないんですね。

趙 はい、登山隊を送り出す団体としては、実績をあげるために、どうしても経験のある人を隊員に選びますから、若い人にはなかなかチャンスがないのが現状です。

登山の大衆化をめざして

趙 それに、韓国では山の情報交換の場が少な

いですから、特に地方の人にとっては不利ですね。昨年でしたか、山学同志会の小西（政継）さんが日本から来られて、馬山^{マサン}というところで講演されたんですが、たいへん多勢の人が集まりました。地方ではなかなか山の話聞く機会がありませんから、珍らしさもあったと思いますが、大好評でした。

—— 韓国では、山岳雑誌のようなものは発行されているんですか？

趙 はい、「山」という雑誌があります。しかし、現在はまだハイキングを主としたものです。フリー・クライミングとかアルパイン・クライミングの記事は少ししかないですね。それと、韓国日報社が出している「レジャー・スポーツ」という雑誌があります。これはいろいろなスポーツをとりあげていまして、たまに登山のことを載せます。編集者が私の友人ですから、「もっともっと山の記事を載せてください」といつもお願いしているんです。私自身が記事を書くこともあります。私は、自身はもうハードな山登りはやれませんが、多くの韓国の若者に山登りをやってもらいたいの、できるだけのお手伝いはしたいと思います。

—— 今日はどうもありがとうございました。

（インタビュー・構成 吉田憲司）

—— 未踏のロマンを求めて —— ラブチェ・カン（7,367m）登山隊隊員募集

こつこつと積み重ねてきたH A Jの登山実績と国際交流・渉外活動が実を結び、1987年秋にチベットの未踏峰ラブチェ・カン^{ラプチェ・カン}をチベット登山協会と合同で登山することになりました。この山はヒマラヤ登山の大先輩であるE・シプトンがメンロンツェ偵察（1951年）の折りの報告で「その先のチベット高原の彼方に人跡未踏のラブチェ・カン連峰の山々が望まれた」と記しているとおり7,000m峰数座を含む未知の山群の主峰です。合同登山の主旨を理解されて積極的にご応募下さい。

1. 目標の山 チベット自治区 ラブチェ・カン（拉不及康峰・Lapche Kang 7,367m）
2. 時 期 1987年9月～11月（75日間程度）
3. 募集隊員 10名

4. 個人負担金 120万円
5. 隊員資格 ①H A J会員であること ②個人負担金を納入でき準備に参加できる者 ③登山技術・体力・健康状態・協調性など合同登山の主旨に合致する者

ラブチェ・カン周辺図



地域ニュース

《 ブータン 》

ブータンと正式に外交関係

日本政府は3月28日、ブータンと正式に外交関係を結んだ。同日、柳谷外務事務次官とブータンのロンポ・ダワ・ツェリン外相が外務省飯倉公館で外交関係開設の書簡を交換、これによって経済協力、文化協定など政府間協定を結べるようになった。

日本は1971年にブータンを承認しているが、ブータンはインドとの条約で外交的にはインドの助言に従うことになっており、昨年末までインド、スイスなど8ヶ国としか外交関係を結んでいなかった。

《 中 国 》

71の中国人・外国人出入国

通関港発表

中国公安省スポークスマンは4月7日、71の通関港（口岸）で中国人・外国人の出入国を認めると発表した。

同スポークスマンは、中国人・外国人の出入国通関港を明確にするため「中華人民共和国外国人入国出国管理法」、「中華人民共和国公民出国入国管理法」と国務院が公布した「国境防備検査条

例」の規定に基づいて、中国人・外国人の出入国通関港を正式に発表する、と述べた。

これらの通関港は次の通り

○空 港

北京、上海虹橋、天津張貴荘、ハルビン、瀋陽、大連周水子、西安、昆明、ウルムチ、南寧、桂林、成都、南京、杭州、アモイ、高崎、福州義序、広州白雲、海口

○港

上海（宝山製鉄所、石油化学埠頭を含む）

天津、

遼寧省～大連（新港を含む）、営口

河北省～秦皇島

山東省～青島（黄島を含む）、煙台、石臼、威海、黄島龍口

江蘇省～南京、連雲港、南通、張家港

浙江省～寧波、温州

福建省～福州、厦門、泉州

広東省～広州（州頭嘴を含む）、黄埔（芳村を含む）、汕頭、汕民、海口、湛江（霞海、南油埠頭を含む）、蛇口（赤湾を含む）、恵陽澳頭、太平、八所、開平三埠、三亜、珠海九州、中山、江門、肇慶、番禺、花山、台山広海、深圳大亜湾、深圳梅沙

広西チワン族自治区～北海、防城、梧州

○陸 地

遼寧省～舟東

吉林省～図們

ネパール及びインドとの国境開放地



内蒙古自治区～満洲里、二連

チベット自治区～ニャラム

新疆ウイグル自治区～クンジェラブ

広東省～深圳羅湖、深圳文錦渡、深圳沙頭角、
珠海拱北、広州（駅）

☆次の14通関港は、国境を接する両国政府職員の
証明書に基づく通行のみに限る。

吉林省～集安、和龍県南坪、龍井県開山屯、龍
井県三合、渾江市臨江

黒龍江省～綏芬河、黒河

新疆ウイグル自治区～コールガス、バクト、
トルゴト

チベット自治区～フラン、ギイロン

雲南省～畹町、瑞麗

☆次の12通関港は、特別な許可を受けた者だけが
入出国できる。

○空 港

新疆ウイグル自治区～ホータン

内蒙古自治区～ハイラル

○港

広東省～広州大鏡島、珠江口桂山島、恵陽三門
島、拱北湾仔

浙江省～梅門、舟山沈家門

福建省～東山

○陸 地

広西チワン族自治区～友誼関

雲南省～河口

チベット自治区～ツォモ

この新たな開放措置によって、中国・ネパールの
国境は、従来のコダリ～ニャラム間ルートの他、
限定付きではあるが、西ネパールからフラン（普
蘭、インド名～タクラコット）へ抜けるルートと
中央部ネパールのランタン谷の入口にあるシャベ
ルベンシからギイロン（吉隆）へ抜けるルートも
開放された。

また、シッキムのガントックからツォモ（亜東）
へのルートも限定付きで開放された。

トピックス

常務理事会報告

日 時 4月17日（木）18時～21時

於 H A J ルーム

出席者 遠藤登副会長、稲田定重専務理事、山森
欣一、八木原罔明、飛田和夫、尾形好雄
各常務理事、吉田憲司事務局員

議 事 ①昭和60年度事業概要報告

高所登山事業（7隊）、野外活動事業
（2隊）、国際交流事業について各々概
要報告。

②昭和61年度事業概要

カラコルム、インド、中国四川、中国
チベット（4隊）、ブータンの計8隊の
計画と陣容について検討。

③昭和62年度事業概要

61年度との関連及び陣容について検討。

④20周年記念事業検討委員会発足の件。

インフォメーション

藤江幾太郎・山の画展・第31年

— 山の画文集上梓記念を兼ねて —

第31年を迎えた藤江画伯の山の画展が、下記の
通り開催されます。

尚、今年5月に上梓されました山の画文集（第
3冊）のサイン会も同会場で行なわれます。

記

日 時 7月1日（火）～7日（月）

11時～18時30分（最終日は17時迄）

会 場 朝日アートギャラリー

※新作油画 100号～0号約30点出品。

東京集会のお知らせ

5月24日（土）に、昭和61年度通常会員総会が
開催されますので、5月の東京集会は中止させて
頂きます。

第一回 Expedition 研究会開く

—— HAJ・北海道グループ ——

HAJ北海道グループでは、定例化していた集会在、この2～3年ブータン遠征の準備等で充分に実施されなかったことを反省し、世話人会を開いてグループとしての今後の活動等を話しあった。

その結果、HAJ本部の各地域に対する要望をも踏まえて当面以下のような方針で活動して行くこととなった。

①北海道グループの世話人会の再編成（代表・阿部淳理事、大内倫文評議員、森美枝子、大崎正信、戸谷薫、高揚健司、菅野昌子）

②定例集会の再開

③ニュース・レターの発行

④遠征の研究。

特に定例集会和ニュース・レターを通して情報の交換を行い、遠征の研究は個人レベルの段階からグループへと拡大して行くこととした。

又、これら当面の活動を順調に行うことによって、ヒマラヤへの志向を定着させ、北海道グループが遠征のための組織となるのではなく、これらの活動のなかから北海道グループの遠征を企画できる基礎を育てて行くことを主眼とする。そのためには“目標”は持つが、急がず慌てずに熟柿が落ちる時を待つことを恐れないようにして行く。

新しい活動の皮切りとして、本部から講師を迎えてHAJ北海道グループによる「第一回Expedition 研究会」－山田昇氏を囲んで－を開催した。内容は以下のとおり。

日時 4月5日（土）14時～6日（日）12時

場所 北海道青少年会館

講師 山森欣一、山田昇

参加者 40名（内HAJ会員15名）

5日（土）

15:00 ヒマラヤ諸国の情勢と登山の動向〔山森〕

はじめに講師から、日本の登山界の動向として、シンプル登山を目指す方向が、いつの間にか形だけが模倣されている面が多いことや、登

山をスポーツ化しようとする結果、山の行為（経験）が少くなり体力強化の面がスポットライトを浴びている等の現状が紹介された（後出）。又、ヒマラヤ諸国に遠征する各国の登山隊は、必ずしも少人数による隊や、アルパイン・スタイル、無酸素登山を目指す隊ばかりではなく、それぞれの登山指向に合って徒労を組んで乗り込んでくる事が多い事なども話された。

次いで最近の8,000m峰の話題として、①エベレストの中国・ネパール両国からの交差縦走の話題（1985年10月24日付読売新聞報道）②パキスタン政府による8,000m峰登山の若干の規制改定、③チョー・オユー峰における越境問題（ネパール側から許可をとりながら、中国側で登山）が紹介された。

16:00 8,000m峰6座を登るまで〔山田〕

講師から自分が山登りを始めたいきさつからヒマラヤ登山へ向かった経過の概略が話された。

次いでそれぞれのヒマラヤ登山について、その動機や、登山の模様、仲間達との思い出が、エピソードとスライドを混えて語られた。講師が行ったヒマラヤ登山16度の内の半数8度はHAJ隊であるため、時折山森からHAJ側としての対応等が補充説明された。

18:00 夕食

19:15 世界の未踏峰について〔山森〕

7,000m峰を中心に別紙位置を参考として、主な20座について許可取得状況や見通し等が紹介され、一部の山についてはスライドで説明があった。

20:00 無酸素登山について〔山田・山森〕

講師から無酸素登山という言葉を使用するのは、最終キャンプを8,000m近いラインに設けなければ陥せない山であることが強調され、自分自身が既に8,000m峰に5度登頂した経験を踏まえて可能だったことが語られた。山森から

は、無酸素登山は最高の経験者のみに許される挑戦ではないかとの感想が話された。

21:00 懇親会

6日(日)

9:00 アルパイン・スタイルについて(山田・山森)

講師から冬期マナスルにおける登山についてその発想と実際が話され、特にアルパイン・スタイルを適用できるルートとできないルートを見極めめることが重要であることが強調された。山森からは、この方法はあくまでも一方法に過ぎないこと、善悪の問題ではないこと、形にとられるのではなく、精神が重要であることが話された。

10:30 冬期登山と全般質疑(山田・山森)

講師から、ネパールの7,000 m ラインの冬は、ノーマルシーズンに較べて難しいとは思われない。寒気に対する装備、食糧は現状でも解決できるが、強風に対する対策が困難であることが話され、風の弱まる時期をどう掴まえて登頂するかが鍵であると述べられた。山森からは、冬期の定義を確定して、それぞれの地域差を考える必要が話された。

質疑に入り、より少い酸素ボンベを使用した効率的な8,000 m 峰登山、登山許可取得の方法、メンバーの選択等活発な質疑の後、12時散会した。

混迷する登山界

ーシンプル登山の台頭とスポーツ化の混同ー

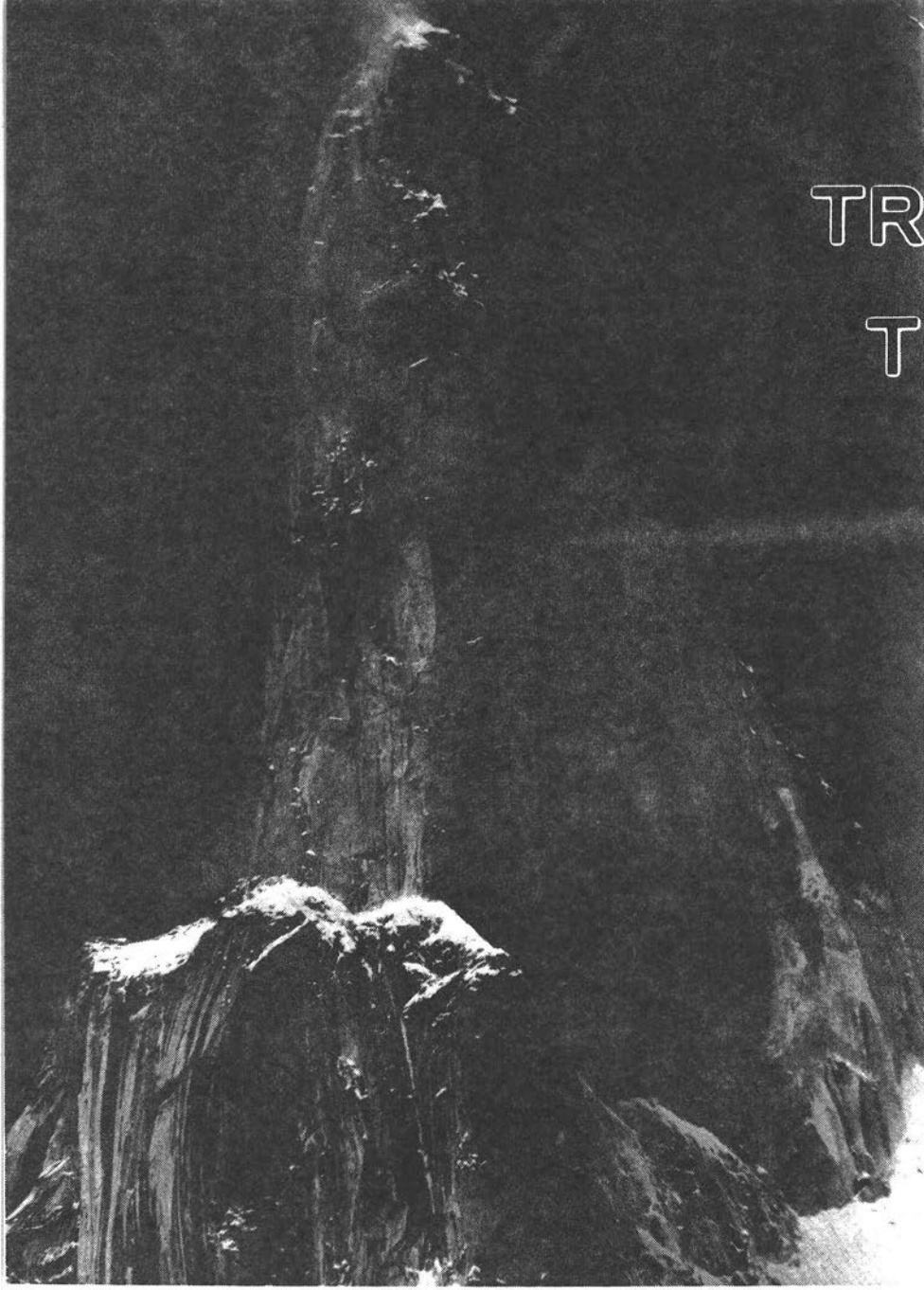
我国の経済が高度に成長し安定した1960年代後半から1970年代は、登山界も大きな影響を受けた。それまでの欲求を一挙に解消せんとするかのどとき、アルプス詣でやヒマラヤ登山が続いた。だがこれらの狂騒状態が一段落する前後から一部の登山者達は、「登山の自然への回帰＝シンプル登山」を主張し実践し始した。岩登りにおけるフリー化、高所登山におけるアルパイン・スタイル、ヒマラヤ登山における無酸素登山等がそうである。

いつの時代でもどの分野でも物事は、主流を時代遅れ・保守的とすることによって発展してきた。登山界も例外ではなかった。登山の自然への回帰を呼び実践した先蹤者達には、実践を通して時を見つめ、今登山はどうあるべきか、何が必要なのかの確固たる信念があり(精神・思想)それに基づいて実践し続けた。だが、一度シンプル登山が登山者の共鳴を受けると、それは言葉だけが独り歩きし定着し、魂、ない(精神・思想)型だけが模倣される事が多くなった。その結果ボルト・ハーケンを乱打する以上のおびただしいナッツ類を使用した岩登りが流行し、コストが安ければシンプルでありライトE X Pである、と云うような登山(コピー登山者)が多くなり、揚句のはてはライトE X Pだから酸素を持参しないと云って、高度障害の隊員を見放すような笑えない登山隊も出てくるのである。

一方、登山はスポーツか?の議論は、以前から活発に行われており、今後もこの議論は続くであろう。今後の登山界の進展方向はこの問題を抜きにして考えることは出来無いであろう。たとえば登山をスポーツと考える者には、登山行為をスピード化することが最大の関心事となり、スピードが故にもたらされる結果として「休暇が少なくて済む・コストが安くて済む・危険にさらされる時間が短いため安全である」等を掲げることによって、社会的に価値が大きいことを主張するだろう。このためには、体力を中心としたトレーニングがクローズアップされ、山を相手にしたトレーニングはすくなくなることが予想される。単に極限にだけ挑むようなスポーツには通常トレーナーがいるように、これらを主張する者は当然の事として、このような制度を導入して行くだろう。日山協指導員制度の形骸や、社会人山岳会・職域山岳会リーダーの登山者養成の立場と、アルパイン・ガイドの競合現象がみられる中で、登山をスポーツ化しようとする者には、トレーナー制度は大きな魅力であろう。

今はまさに、シンプル登山の問題と登山のスポーツ化の問題がこん然一体となり、日本の登山界を混迷させていると言えるだろう。

(文責：山森欣一)



TRANGO TOWER

6,251 *m*

JAPANESE-POLISH KARAKORAM VENTUR 1986 日本・ポーランド合同カラコルム登山隊1986 計画

趣 意

1985年7月、世界第2位の高峰「K-2」の登頂に成功した私たちは、ポーランドの著名な登山家ヴォイテク・クルティカ氏をベースキャンプに

迎えました。ヒマラヤで精力的なクライミング活動を続けるクルティカ氏は、ガッシャブルム-4峰の残された課題「シャイニング・ウォール」と呼ばれる西壁を、たった2人で、8日間の登攀の末に登り切りました。そして、その足でK-2に

やって来たのでした。私たちは、登山界の展望や理想的な登山について語り合いました。

そんな中から、一つの新しい試みとして、トランゴ・タワーをアルパイン・スタイルで登るとい
う計画が生まれました。トランゴ・タワー (6,251 m) は、パキスタン・カラコルム、バルトロ氷河
の入り口にそびえる美しい岩塔です。ジョー・ブ
ラウンら6人の英国隊の2度にわたる挑戦の末、
1976年に初登頂されました。1984年には、デヴィ
ッド・ランパードら5人の英国隊により第2のル
ートが試みられましたが、惜しくも頂上に達する
ことはできませんでした。私たちの計画は、今夏
このトランゴ・タワーに新ルートを開こうという
ものです。

世界の第一線で活躍するクライマーと合同で登
山をするチャンスを得て、私たちは現在張り切っ
て準備を進めています。本計画に御理解、御支援
の程、よろしくお願い申し上げます。

日本・ポーランド合同カラコルム登山隊

日本側代表 山田 昇

計画の概要

1. 隊の名称

日本・ポーランド合同カラコルム登山隊1986

JAPANESE-POLISH KARAKORAM

VENTURE 1986

2. 目 的

パキスタン・カラコルム、トランゴ・タワー
(6,251m)の新ルートのアルパイン・スタイ
ルによる登頂

3. 期 間

1986年 5月中旬 ～ 7月初旬

4. 派遣母体

日本ヒマラヤ協会、ポーランド山岳協会

5. 隊の構成

日本側メンバー 3名

ポーランド側メンバー 1名

リエゾン・オフィサー 1名

コック 1名 計 6名

日 程

5月19日 日本出発

5月20日 全メンバー、イスラマバードにて合流
22日 イスラマバード発
23日 スカルド着
25日 スカルド発 (キャラバン開始)
6月2日 B.C着
5日
} 登山活動
20日
22日 B.C撤収 (帰路キャラバン開始)
27日 スカルド着
30日 イスラマバード着

メンバー

〔氏名、年齢(1986.1.1現在)〕
〔住所、ヒマラヤ登山歴〕

1. ヴォイテク・クルティカ

(Wojciech Kurtyka 38歳)

1972 ヒンズー・クシュ、アカ・チョー (7,025 m)
東壁 初登攀

1977 ヒンズー・クシュ、コー・イ・バンダカー
(6,843 m) 北東壁 初登攀

1978 インド、チャンガバン (6,864 m) 南バ
ットレス 初登攀

1980 ネパール、ダウラギリ I 峰 (8,167 m)
東壁 初登攀

1983 カラコルム、ガッシャブルム I 峰 (8,068
m) ～ II 峰 (8,035 m) 縦走

1984 カラコルム、ブロード・ピーク 北峰 (7,700
m) ～ 中央峰 (8,013 m) ～ 主峰 (8,048 m) 縦走

1985 カラコルム、ガッシャブルム IV 峰 (7,980
m) 西壁 初登攀

2. 山田 昇 (Noboru Yamada 35歳)

1978 ネパール、ダウラギリ I 峰 (8,167 m)
南東稜 初登攀

1980 インド、ケダルナート・ドーム (6,831 m)
登頂

1981 ネパール、カンチェンジュンガ (8,598 m)
登頂

ネパール、ランタン・リ (7,206 m) 初登頂

- 1982 ネパール、ダウラギリ I 峰 (8,167 m)
ベア・ルート 初登攀
- 1983 ネパール、ローツェ (8,516 m) 登頂
ネパール、エベレスト (8,848 m) 冬期登頂
- 1984 インド、マモストン・カンリ (7,516 m) 初登頂
- 1985 カラコルム、K-2 (8,611 m) 登頂
ネパール、エベレスト (8,848 m) 登頂
ネパール、マナスル (8,156 m) 冬期登頂

3. 斉藤安平 (Yasuhira Saito 32歳)

- 1982 ネパール、ダウラギリ I 峰 (8,167 m)
ベア・ルート 初登攀
- 1984 ネパール、ガウリ・サンカール南峰 (7,010 m) 南東稜 初登攀
- 1985 ネパール、マナスル (8,156 m) 冬期登頂

4. 吉田憲司 (Kenji Yoshida 32歳)

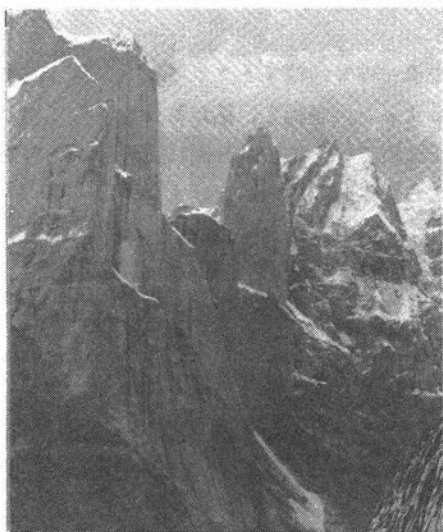
- 1982 カラコルム、ハチンダール・キッシュ (7,163 m) 初登頂
- 1984 インド、マモストン・カンリ (7,516 m) 初登頂
- 1985 カラコルム、K-2 (8,611 m) 登頂

連絡先

日本 日本ヒマラヤ協会
(The Himalayan Association of Japan)

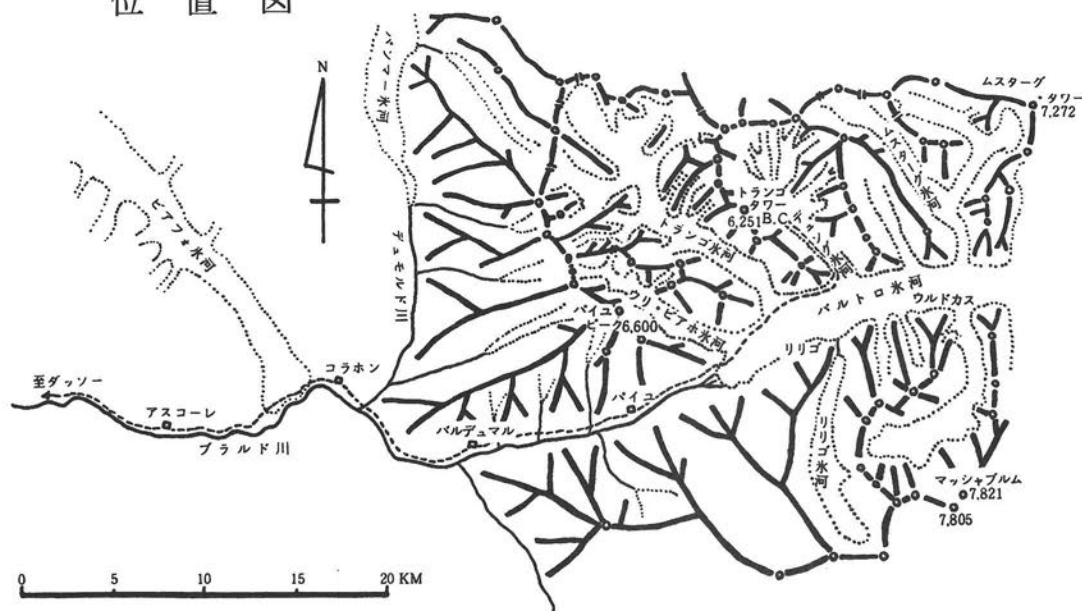
ポーランド ポーランド登山協会
(The Polish Mountaineering Association)

パキスタン Silk Road Tour Service Co.
P O, Box No.1685 Islamabad
PAKISTAN ☎ 822693



▲トランゴ・タワー東面

トランゴ・タワー
位置図



〈1985年冬期ヒマラヤの記録〉

二人だけの冬のマナスル

齊藤安平

▲ 6,700m付近を登る

二人で冬の八千米峰へ

東宝映画「植村直己物語」の撮影隊としてエベレストに出かけた私は、アイランド・ピークで最後の撮影を終えた。その帰路のことである。1982年のダウラギリ遠征以来の仲間である山田昇から「もう一度寒いところへ行かないか？」とマナスルへの誘いをうけた。今冬のマナスルは、以前からカモシカ同人の計画として許可を取っていたのだが、予定していた隊員がエベレスト撮影隊に参加するということで中断していたものだ。この一年間、この映画のため自分の山登りが出来なかった私は直ぐ行くことを決定した。ネパール・ヒマラヤの冬のシーズンの幕開けは、20日後に迫っていた。

ヒマラヤの、特に8,000m峰の冬期登山は非常に困難である。特に西風の強まる12月中旬から1月にかけては、強風のために登ることが殆ど不可能と思えるほどである。比較的条件の良い時期としては、風の吹き始める前の2週間くらいと1月中旬から2月にかけての2つの時期がある。我々は12月上旬を登山期間とした。

また、ベース・キャンプ以上ではシェルパを使わず、2人だけのアルパイン・スタイルでやってみようと言う事になった。2人だけで8,000m峰をやると云うのは、私が山岳会（名古屋山岳会）

に入ってから夢であり、昔、会員の影山と計画をたてた事があったが、今冬にやるようになるとは思ってもいなかった。

11月15日にカトマンズへ帰った我々は、早速、登山料を払い込み、準備を開始した。準備と言っても簡単なもので1日で済んでしまう。然し、ルクラに置いてきた装備がなかなか到着せず、取り敢えず食料、テント等と共に3人のシェルパをキャラバンに出した。

アプローチは、ヘリコプターで

12月2日、山田、齊藤、連絡官の3名を乗せたヘリコプターは、カトマンズ空港を飛び立った。カトマンズ盆地を抜けると一気に視界が開ける。遙か北方にマナスル三山、そして眼下遙か下にはブリ・ガンダキの流れが白い一本の糸の様に流れている。ヘリコプターはブリ・ガンダキの谷に沿って北上する。この谷は貧しいと聞いていたが、殆ど集落を見ることがない。

やがて、マナスルを仰ぎ見る様になると、最奥の村、サマ部落に到着。ヘリコプターは村の高台に砂ぼこりを上げて着陸した。僅か1時間の空の旅であった。キャラバンをすれば、一週間以上かかるところだ。

早速、村人達が集まってきた。未だ我々のポーターは着いていない様だ。ゴンパの一室を借りて

入りこむ。登山が終るまで、ここを使わせて貰うことになるだろう。

ポーター達が到着するまでの2日間は、惨めなものであった。この村にはジャガイモしかない。勿論、お茶もない。湯を沸かすナベすらなかった。水とジャガイモとカトマンズから持ってきた食パンでひたすらポーター達の到着を待った。

12月4日、今日は着くだろうと朝から下の方を見ながらポーター達を待つ。その内にコックのパサンが汗だくになって登ってきた。ヘリコプターの飛んでいくのを見て、我々が到着したのを知り「サーブ達が腹をすかしているだろう。」と急いで登ってきたのであろう。早速、タルカリ、ダル・バートを腹一杯食べる。

その後、テントを干したり、登山用の食料を再梱包をしたりして準備を始める。急がないと風が吹き始める。

今朝は一時間くらいマナスルの頂上から東へ長い雲がでていた。

テント1張のベース・キャンプ

12月5日、連絡官とナワン・ギルミを残し、4人でベース・キャンプへと向う。

’82年の時は、凄い雪があったらしいが、今年は全然ない。日本の秋の山を歩く様な気持だ。

秋のスキー隊のベース・キャンプに着くと、そこにはサマ部落の人が数人登って来ていた。スキー隊の残していったものを取りに来たのだらう。我々のベース・キャンプは、さらに1時間ほど登ったところにある、’82年のH A J隊と同じ所に作る。小さなカルカが作ってあったので、その中を整地して、テントを1つ張るとベース・キャンプ



▲ヘリコプターでサマ部落に到着

の出来上りだ。

H A J隊で遭難した故佐久間氏のケルンへ行く。ケルンはすっかり雪の下に埋まっており、掘り出すことは出来なかったが、タバコを供えて黙とうをしてきた。

アン・パサンは、遅くまでラマ教のタルチョーを張ったり、護摩壇を作ったりしていた。

1度目は強風で断念

12月6日、朝、護摩壇に菓子やツェンパを供えて登山の安全を祈る。私は特別に神を信じるわけではないが、お経を聞きながら立ち上がる護摩の煙を見ていると心が静まり、さわやかな気持ちになってくる。

9時、山田と2人で20kgのザックを背負って出発。シェルパ達は、最終キャンプまで一緒に行くと言ったが、2人だけでやることにこだわった私達は、その申し出を断った。

初めは気にならなかった雪も、氷河の中程に出てクレバス帯に入ると、膝位までのラッセルになる。交替でクレバス間を縫ってラッセルを続ける。冬とは云え、照りつける陽差しは強く、下着だけになって歩く。途中から氷河の左岸、ナイケ山の山腹をトラバースしながらナイケ・コルを目指す。2時半頃マナスルに陽が沈むと急に寒くなる。疲れてもきたので、ナイケ・コルの手前1時間位の所でテントを張る。

12月7日、クラストした雪面を時々踏み抜きながらナイケ・コルへ、ここから急登が始まる。小さな雪の尾根を登り、セラック帯に入る。所々に秋のスキー隊のと思われるロープが埋まっていた。セラック帯のルートは、ベース・キャンプから双眼鏡で偵察しておいたのだが、中に入ってしまうと良く判らない。ビルの様に大きいセラックの間を縫って進む。ラッセルはふとももくらいまである。高度は、6,000m位なのだが、そんなに苦しくもない。大きなクレバスを3つ迂回しながら越え、クレバスの間の広い平らな雪面に出た。スキー隊のキャンプ跡らしく、スキーが埋っていた。我々もここでキャンプすることにする。上にも大きなクレバスが有り、雪崩から我々を守ってくれるだろう。先日から気になっている帯の様な

雲は、今日はいつまでも残っている。西風が吹き始めたのだろうか。

12月8日、朝起きると、空はすっかり雲におおわれていた。遠くチベットの方は、陽が差しているのが見える。マナスル東稜のピナクルも白くかすんでおり、風が吹いている様だ。

11時、最終キャンプ地まで行くことにし、1泊分の食糧と燃料だけを持って出発する。

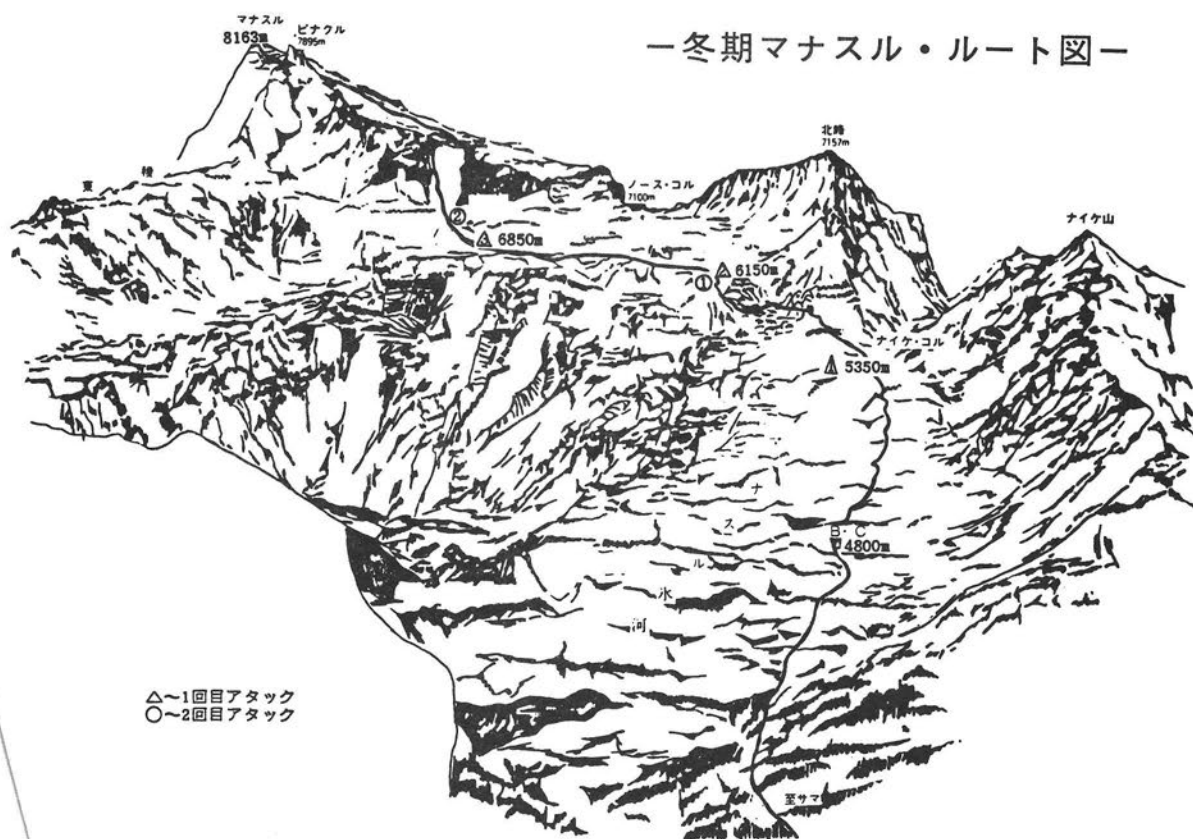
キャンプ地の上は、大きなクレバスが2重、3重に重なっており、それを越えるとあとは頂上プラトーまで一気に急斜面が突き上げている。何度もクレバスに行く手をさえぎられながら、北峰寄りに廻り込み、クレバス帯の上の小さな台地に着く。ここからは、一直線に直上してプラトーの下のアイスエプロンと呼ばれている岩と岩に挟まれた氷壁を目指して登る。雪は風で良く締まっており、ピッチが上がる。登るにつれてマナスル北峰も目の高さとなり、そして、北のコルを越えて冷たい風が吹きつけてきて、一気に体温を奪っていく。斜面は相変わらず単調で、テントを張る様な所は見つからない。5時、ちょっとした窪みを見つ

け、ピッケルを振ってテラスを作る。風は益々強くなり、小さな氷片がひっきりなしに落ちてくる。暗くなる頃、テントを張り終えて中に入ったが、横になって寝ることは出来なかった。腰かけたまま、寝袋に入って眠る。

12月9日、真夜中の12時頃起きて出発の用意を始める。外は相変わらず風が吹いてるが、1回だけのアタックの予定で来ているので出発するしかない。テント、炊事具などをザックに入れてデポし、テルモスとザイルだけを持って、3時30分に出発する。

月も無く、辺りは真暗である。雪壁を黙々と登るが、時々、竜巻の様な雪まじりの風が吹く。夜明け前にアイス・エプロンの入口についた。益々風は強くなってきた。これ以上登っても登頂は出来ないだろうと思い、一旦、戻ってやりなおすことにする。

下りは、快調なペースで進み、キャンプ地で荷物をまとめて、ベース・キャンプ目指して一気に下る。第2キャンプ地くらいまで降りると風も無く、暖かい。先程までの寒さが嘘の様だ。途中ま



一冬期マナスル・ルート図一

で、アン・バサンが迎えに来てくれた。彼の持ってきてくれたタルカリを食べ、ベース・キャンプまで下る。

ベース・キャンプは、コックのバサンの手によって、既に撤収されており、もう一度テントを張り直す。バサンは、再アタック用の食料と燃料を取りにサマ部落へ降りていった。

12月10日、一晩ぐっすり寝たら、2人共顔がむくんでいた。

終日、衣類を乾かしたりして通す。昼頃、バサンが上ってきた。サマ部落の村人も数人上ってきて、スキー隊の残していった荷物を取りに行くと言う。チベット服にチベット靴、なんとも異様な格好だが、何人かはアイゼンや登山靴を持っていた。彼らは、そのままナイケ・コルまで行くと云って登っていった。

寒冷の頂を踏む

12月11日、高所食も燃料もこのアタックで最後である。

8時半、一緒に行くと云うシェルパ達をとどめ、再び2人でアタックに出発する。先日のトレースが残っており、快調なペースで進む。ナイケ・コルには、昨日登っていったサマ部落の村人が2人残っていた。他の村人が上へ登っていくのが見える。ここは前回、我々が来た時には、全て雪に被われていて何も無かったのだが、彼らは、スキー隊のキャンプ地を見つけて掘り出していた。彼らは、此の地で小さなビニール・シートをかぶっただけで一夜を過した様だ。

我々も前回の第2キャンプ地を目指して登る。トレースがあると実に早い。途中で彼らが降りてくると出会う。埋まっていたスキーやロープを掘り出してきた。ロープは彼らにとって貴重品である。

2時半、前回と同じ所にキャンプを張る。

12月12日、朝起きると10cm位雪が積っていた。天気も良くない。前回無理して登って、手痛い目にあっているの、今日は沈殿とする。夕方、晴れてきたので、食料を1日分だけ残してあとは全部食べる。

12月13日、8時15分出発。クレバス帯は前回と



▲ナイケ・コルを目ざして登る

同じコースを辿る。昨日の降雪と風でトレースは消えており、ラッセルが辛い。クレバス帯を抜けてからは、前回よりも中央寄りにルートを取る。

途中、'82年H A J 隊のフィックス・ロープが残っていた。アイス・エプロンの直下にクレバスが在り、風もよけられる、良いテント場を見つけた。今夜はゆっくり寝られそうだ。明日の好天を祈ってシュラフに入る。

12月14日、午前1時頃起きる。ブラック・コーヒー、ほうじ茶、五目飯の食事を済ますと、あとはキャンディー数個とカロリーメイト2個になってしまった。テルモスにゲーターレードを入れ出発。今回は場所が良いのでテントは張りっぱなしで行く。

今回は、着るものを増したので少しは暖い。アイスパイルとピッケルを両手に持ってアイス・エプロンを登る。アイゼンが気持ち良く刺さる。10m位先に行く山田のランプが見える。時々、立ち止まってルートを見る。山田は右の方を、私は左の方をそれぞれ勝手に登る。その内、50m位離れてしまった。風は余り無いが、大変寒い。アイスパイルを持つ手の感覚が無くなる。

夜明けと同時に頂上プラトーに着く。ここは風のため岩が出ている。テルモスのお茶を飲み、ヘッドランプ、テルモス、アイスパイルはデポする。少し行った所に過去の登山隊のキャンプ地があった。酸素ボンベやロープが散らばっている。頂上プラトーは広い。どこが頂上なのか判らないままプラトーを進む。かなり進むと左の方から斜面が降りてきており、その奥のほうにあるのが頂上ろう。単調な雪壁を只、黙々と登る。先を行

田はもう見えない。絶対に登るんだと自分に言い聞かせ足を運ぶ。その内、頂上らしいピークが見えてきた。最後の力をふりしぼってその急斜面を登りきると、その先はナイフ・リッジとなって続いており、山田が待っていてくれた。ザイルを結び鋸状になった稜線を登る。3ピッチで小さな三角形の頂上に着いた。南壁側はスッパリと切れ落ちている。

寒さの為、写真を撮ることも出来ず、直ぐ下山にかかる。その時、雪と岩の間にあったピースの缶を山田が見つけた。登頂の証にもなるので胸のポケットに入れ持ち帰る。

アイス・エプロンの下り口までは、難無く歩く事が出来る。デポ地でテルモスに残っていたジュースを飲み、アイス・エプロンを降り始める。下山の事故が多いので慎重に後向きになってゆっくり降りる。疲れた身体には辛い、ここで落ちるわけにはいかない。アイス・エプロンを半分ほど下ると雪もやわらかくなり、楽に降りることが出来た。

3時に疲れ切ってキャンプに着く。食べ物も何もないが水を作って飲む。今日は、ここに泊って明日、降りることにする。

12月15日、8時20分、キャンプを後にする。空腹と疲労の為、下りにもかかわらず少しも進まない。氷河のクレバス帯のところで迎えに来てくれ

たアン・パサンに会う。持って来てくれたチャパティとタルカリを貧る様に食べ、ベース・キャンプに戻った。パサンはもうベース・キャンプをたたくで梱包していた。30分程休んでからサマ部落を目指して下る。

途中まで連絡官が迎えに来てくれていた。

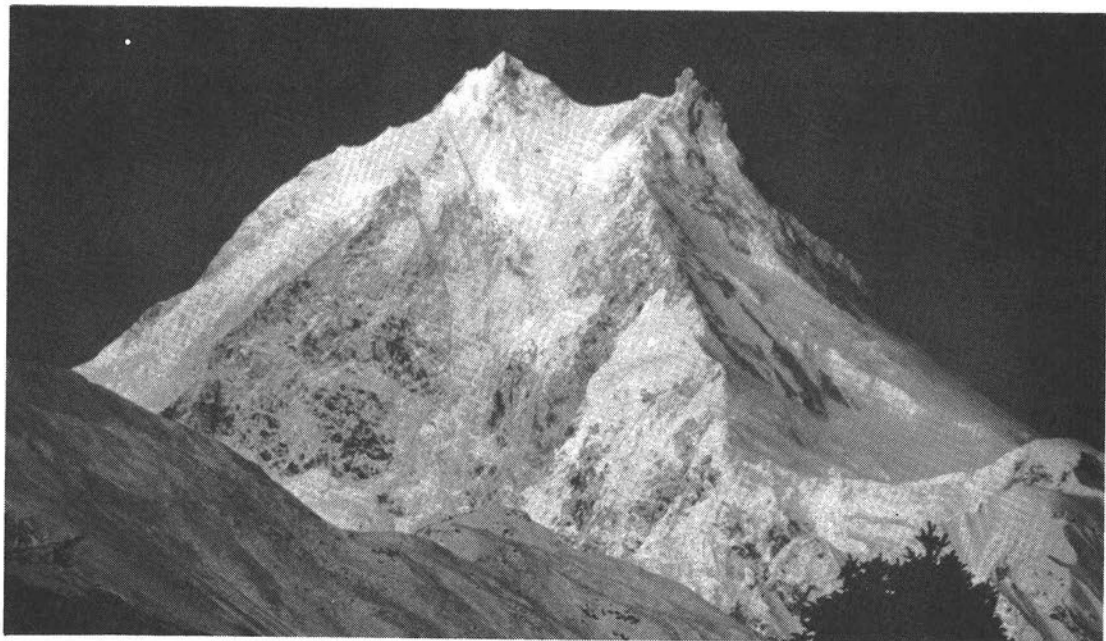
夜、我々のゴンパには村人がチャンを持って祝福に来てくれた。悪名高きサマの住人達だが、我々の小さな登山隊に対しては、非常に親切であった。

ブリ・ガンダキを下る

12月17日、登山が成功しても失敗しても帰りのキャラバンは楽しい。我々も3人のポーターと共に帰りのキャラバンに出発した。すっかり秋も深まったブリ・ガンダキの谷をのんびりと歩く。連絡官も2週間以上ゴンパに閉じこめられていたので、カトマンズへ帰れるのが楽しそうだ。

ナムルーの部落で泊ることにし、民家の二階に上がり込む。ここには、大きなチェック・ポストがあって、10人位の警官が駐在している。我々が連絡官は、サブ・インスペクターなので、此々の誰よりも偉い。

12月18日、割合開けていた谷も峡谷になり、山腹につけられた道を歩く。今日も昨日に続き、昼飯しは無し。食べ物もないので、只、黙々と歩く。





▲第一キャンプ

時々、下から上ってくるキャラバン隊と出会う。皆、米やその他の日用品を町から運んで来る。今日は、途中で部落が無いので河原でキャンプ。流木を集めて来て、大きな焚火をたく。夕方、ドッコに数羽のニワトリを入れたニワトリ売りが来た。パサン達はいらないと云ったが、連絡官が欲しうだったので買う事にした。90ルピーに値切ったが、釣りが無いと云う事で、結局100ルピー払われた。

12月19日、今朝で我々の持ってきた食料は全て無くなってしまった。

ナワン・ギルミ、パサンと一緒に4人で歩き始める。アン・パサンは、ポーター達と一緒に歩いている。早くキャンプ地に着いて、何か食べようと4人で走り出す。1時間程前に出発した連絡官を追い越して先を急ぐ。時々、小さな家があり、小さな畑が作ってある。どうやって生活しているのだろうか。

2時半に今日の泊り場のガタ・コーラに着く。小さな雑貨屋があってビスケットを売っていた。夕方になってナワン・ギルミが5合位の米を買ってきた。これだけしか無かったとの事。この日は近くの畑でキャンプ。ゆでた里イモがおいしかった。真暗になってから漸くポーター達が到着。

12月20日、ガタ・コーラから1時間位行った所にあるジャガットで朝食。此々にはチェック・ポストがあって、ちょっとした部落である。食事は注文を受けてから米を炊くので時間がかかる。その間、日向ぼっこしたりして時間をつぶす。1時間半程して出発する。村を抜けて暫く行った河原でポーター達が食事をしていた。またここで1時

間程遊ぶ。今日は途中で温泉があると云うので、そこまでパサンと3人で走る。3時間位行った所に温泉が湧いていた。石と竹の樋で身体が洗える様になっている。久し振りに頭や足を洗ってさっぱりする。

この日は、コーラ・ベンと云う部落でキャンプ。親切なパッティの親父がさつまいもを御馳走してくれた。この親父さん、はじめ我々をシェルパと間違えて、「メンバーは、どこに居るんだ、何人だ」などと聞いていた。

12月21日、キャラバンも終りに近づいて来た。民家も増えてきて、ラーメンやビスケット、タバコなども売っている。下へ降りてきたので暑く、半袖シャツに着替えて歩く。

今日の泊り場は、ソディ・コーラ。田圃の中にパッティが一軒ある。

12月22日、今日は、ブリ・ガンダキの最大の部落、アルガットだ。紅茶、ビスケット、ラーメンを食べて出発。崖沿いの道を暫く行くと田圃道になる。空も開けてきて気持ちが良い。

2時間ほどでアルケに着く。典型的なネパールの街道町である。パッティが何軒もあり、雑貨屋では沢山の品物を置いている。お茶を飲んでビスケットを食べているとポーター達がやってきた。彼らにもお茶を飲ませてやり、一足先に出発する。広くなった道をパサンと3人で走る。1時間半ほどでアルガット・バザールに着く。大きな部落で学校もある。ここは、トリスル・バザールからゴルカに抜ける古い街道上にあり、古くから要衝の地として栄えてきた所である。パッティには、ビールやコーラ、コーヒー、それに韓国製のフルー



▲サダー、コック、山田、斉藤（左から）

ツ伍詰などもある。取り敢えず食事を頼んでポーターを待つ。

3時頃になって漸くポーターが到着。この先、足を伸ばすかどうか相談するが、結局、我々2人とパサンに連絡官の4人は此々に泊り、アン・パサン、ナワン・ギルミ、ポーターは、もう少し先へ行くことになった。そうすれば、明日にはゴルカに着けるだろう。

日向ぼっこをしながら夕食迄時間をつぶす。

12月23日、今日は、キャラバン最後の日。ゴルカまではかなりの距離なので早目に出発する。道は小さな川に沿って登っていく。昨日までとは違って行き交う人も多い。2時間ほど行った所で、先行したシュルパとポーター達に追いついた。彼らと一緒に、細くなってきた川に沿って登っていく。やがて川が無くなると小さな峠に出た。対岸に今日の昼食予定地のカンチョークの村が見える。1時間ほどでカンチョーク。今日の行程の約半分だ。昼飯しを頼んで2時間ほど休む。暫くしてポーター達もやってきたので出発する。カンチョークの村を抜け、しっかりと石積みされた階段を登ると道は広い尾根の上となり、右手にはマナスル三山が見える。いたる所に部落やバッチェがあり、道を歩く人の服装も次第に街らしくなってきた。

いよいよゴルカも近ずき、最後の下り坂をかけ下る。尾根上にネパール国王の城が見え始め、その尾根をまわり込むとゴルカに着いた。山の斜面に家が並んでいる。街中を通り抜けて道路に出る。通りには沢山の人が歩いており、我々は夕方5時にバス停横のロッジに入った。

1時間以上遅れて連絡官、さらに2時間ほど経ってポーターが着いた。全員揃ったところで夕食。ロッジのレストランは満員でザワザワしていたが、我々9人が食べ始めると、その勢に押されて、皆だまってしまった。

食事の後、ポーターに賃金を支払う。9日分の約束だったが、彼らと居る事が楽しかったので、10日分の支払いと今夜の食事・宿泊代を払う。すると彼らの1人が皆にロキシーをふるまってくれた。

12月24日、朝一番のバスでカトマンズへ向う。

連絡官は、ゴルカ城を見物してから帰るとの事、一週間共にしてきたポーター達と別れて、我々はカトマンズへと向った。

こうして今冬のマナスルの登山は終わった。

ー日本冬期マナスル登山隊'85～'86年ー

隊長 山田 昇(35才) 斉藤安平(32才)

サダー アン・パサン

コック パサン

メール・ランナー ナワン・ギルミ

連絡官 ダナ・B・シン・グルン

＜行動概要＞

- 11月25日 シュルパ3名と隊荷、カトマンズ出発。
ゴルカよりキャラバンを開始させる。
- 12月2日 山田、斉藤、連絡官の3名、カトマンズよりヘリコプターにてサマ部落着。
- 4日 シュルパ3名とポーター5名、サマ部落到着。
- 5日 山田、斉藤、アン・パサン、パサンの4名でBC(4,800m)設営。
- 6日～9日 第1回目のアタックをするも、強風の為、7,200m付近よりBCへ戻る。
- 11日 第2回アタック開始、BCから第1キャンプ地(6,150m)へ移動
- 12日 悪天候のため停滞。
- 13日 第1キャンプ地から第2キャンプ地(7,150m)へ移動。
- 14日 登頂。登頂後第2キャンプ地迄下降。
- 15日 第2キャンプ地～B・C～サマ部落迄下降。
- 17日 ポーター3名と共に帰路キャバン開始。
サマ～ナムルー。
- 18日 ナムルー～河原のキャンプ地
- 19日 河原のキャンプ地～ガタ・コーラ
- 20日 ガタ・コーラ～コーラ・ベシ
- 21日 コーラ・ベシ～ソディ・コーラ
- 22日 ソディ・コーラ～アルガート・バザール
- 23日 アルガート・バザール～ゴルカ
- 24日 ギルカ～カトマンズ

中国登山の和文参考資料一覧

(解放後に発表されたもの、中国登山研究会資料から)

(チベット地区)

- 1) チョモランマ (Qomolangma) 8,848m
 1. チョモランに立つ (日本山岳会隊・エベレスト中国ルート激闘全記録) 読売新聞社 昭和55年6月25日 1,000円
 2. チョモランマ・チベット (日本山岳会珠穆朗瑪登山隊公式報告) 講談社 昭和56年11月10日 5,400円
 3. 珠穆朗瑪登山1980 (北壁及び北東稜の登攀) 「山岳75年」日本山岳会 1980年12月1日 3,500円
 4. みんなが頂上にいた (岡島成行) 山と溪谷社 1983年2月1日 1,900円
 5. 雪煙をめざして (加藤保男) 中央公論社 昭和57年11月15日 1,200円
 6. 果てしなき山行 (尾崎隆) 中央公論社 昭和58年7月20日 1,200円
 7. チョモランマ峰・美しい女神 (王富州) 「月刊 人民中国」1982年6月号 200円
 8. 珠穆朗瑪峰 (1979年チョモランマ偵察隊) 横山宏太郎「岳人393号」1980年3月号
 9. 珠穆朗瑪峰登頂成功 (江本嘉伸) 「山と溪谷513号」1980年8月号
 10. レポート「チョモランマ」編集部「岩と雪77号」昭和55年10月
 11. 絶頂への道・チョモランマ単独無酸素登頂 (ラインホルト・メスナー) 「山と溪谷520号」1981年1月号
 12. エベレストに秘められた (ラルフ・バーカー) 「山と溪谷522号&523号」1981年3&4月号
 13. チベット北壁隊・苦闘の90日 (カモシカ同人) 「山と溪谷571号」1984年4月号
 14. チョモランマ北壁への戦い 上・下 (長谷川昌美) 「山と溪谷597&600号」1985年11月号&1986年1月号
 15. 冬季・チョモランマ北壁 (Topics) 「山と溪谷598号」1985年12月号
 16. チョモランマ単独行 (ラインホルト・メスナー) 山と溪谷社 1985年4月10日 2,200円
 17. エベレスト物語「岩と雪97号」昭和58年8月号
- 2) シシャバンマ (Xixabngm) 8,012m
 1. シシャバンマ1981年・春 (日本女子登山隊の記録) 女子登攀クラブ 1981年9月 2,200円
 2. 女たちの山 (シシャバンマに挑んだ9人の決算) 落合誓子 山と溪谷社 昭和57年12月10日 980円
 3. シシャバンマ峰・氷美の世界 (張俊岩) 「月刊 人民中国」1983年1月号
 4. 女だけのシシャバンマ (北村節子) 「山と溪谷521号」1981年2月号
 5. 手記・私ひとりのシシャバンマ (田部井淳子) 「山と溪谷531号」1981年8月号
 6. 麗峰シシャバンマに立つ (北村節子) 「山と溪谷531号」1981年8月号
 7. 改造人間シシャバンマと戦う (悪天に阻まれた速攻登山) 原 真 「岳人427号」1983年1月号
 8. ドキュメント「速攻登山」 (加藤幹敏) 「東京新聞出版局」1984年3月 2,200円
 9. 現代ヒマラヤ登攀史 (編集部) 「岩と雪111号」昭和60年8月号
- 3) ナムチャ・バルワ (Namcha Barwa) 7,782m & ギャラ・ペリ (Gyala Peri) 7,151m
 1. ナムチャ・バルワ (水野勉) 「ヒマラヤ128号」1982年7月号
 2. ナムチャ・バルワ峰登頂を目指して (李舒平) 「岳人451号」1985年1月号
 3. ナムチャ・バルワ (伊東亨) 「山と溪谷597

- 号」1985年11月号
4. 7,000mの未踏峰をめざして（ギャラ・ペリ偵察）「岳人463号」1986年1月号
 5. 最高峰ナムチャ・バルワとヤル・ツェンポー大屈曲点周辺の山々（山森欣一）「岳人464号」1986年2月号
 6. 秘峰ギャラ・ペリ偵察1985「ヒマラヤ170号」1986年1月号
 7. 東チベットの大湾曲部と幻の高峰（山森欣一）「山と溪谷601号」1986年2月号
 8. ギャラ・ペリとナムチャ・バルワ（伊東亨）「岳人464号」1986年2月号
- 4) ナムナニ（Namunani）7,694m & カン・リンポチュ（Kang Rimpoche）6,656m
1. 未踏の山・辺境の山第5回「カイラス」（加藤洋）「岳人409号」1981年7月号
 2. 納木那尼峰（日中友好納木那尼合同登山隊）「岳人447号」1984年9月号
 3. 西チベットの未踏峰ナムナニに照準「岳人447号」1984年9月号
 4. 聖地巡礼カイラスの旅「ヒマラヤ155号」1984年10月号
 5. チャンタン高原から聖地巡礼の旅（山森欣一）「ヒマラヤ156号」1984年11月号
 6. チャンタン高原と聖地巡礼（山森欣一）「岳人450号」1984年12月号
 7. 神の山 カイラス（五百沢智也）「山と溪谷583号」1985年1月号
 8. 風雪は人を磨く（李舒平）「岳人464号」1986年2月号
 9. 日中合同納木那尼峰先遣隊1984報告書 日中友好納木那尼峰合同登山隊
- 5) クーラ・カンリ（Kula kangri）7,554m
1. 天帝の峰クーラ・カンリを目指して（長谷川浩）「岳人464号」1986年2月号
- 6) カンベンチン（Can Ben Chen）7,281m & ポーロン・リ（Porong Ri）7,292m
1. カンベンチン（京都大学学士山岳会）毎日新聞社 昭和58年7月5日 6,700円
 2. チベット旅情（カンベンチン初登頂）齊藤清明 芙蓉書房 昭和58年7月15日 1,500円
 3. チベットをゆく京都大学学士山岳会（カンベ

- ンチン登頂と学術調査82, 3～5）レポーター 永田秀樹「岳人421号」1982年7月号
4. Der Bergmorgen 3号（故 和田実君追悼号 Porong Ri 報告）大分R.C.C 昭和58年5月17日
 5. カンベンチン（森本陸世）「山岳第78年」日本山岳会 1983年12月 3,000円
 6. ポーロン・リ登頂（梅木秀徳）「山岳第78年」日本山岳会 1983年12月 3,000円
 7. チベット高原学術登山隊1982概要報告書 京都大学学士山岳会

（四川省・雲南省地区）

- 1) ミニャ・コンカ（Minya Konka）7,556m
 1. 貢嘎山（1981年ミニャ・コンガ7,556m 登攀と遭難の記録）北海道山岳連盟 1982年12月30日
 2. 貢嘎の東（中国四川省大雪山脈貢嘎山7,556m 偵察の記録 北海道山岳連盟 1981年3月1日
 3. 手記・さようなら、北壁に逝った友よ（阿部幹雄）「山と溪谷531号」1981年8月号
 4. さようなら、ミニャ・コンガの友（阿部幹雄）「山と溪谷531号」1981年8月号
 5. ゴンガ山・銀雪の王（羅仕明）「月刊 人民中国」1982年11月号 200円
 6. ゴンガで遭難した松田隊員救出記（曾慶南）「月刊 人民中国」1982年11月号 200円
 7. ドキュメント：ミニャ・コンカ大生還へのミステリー（徳丸壮也）「山と溪谷546 & 547号」1982年8 & 9月号
 8. インタビュー：「ここでは絶対にしねない」（編集部）「岳人423号」1982年9月号
 9. ミニャ・コンガの奇跡（救出、治療の戦い）李高中「岳人423号」1982年9月号
 10. ミニャ・コンカ奇跡の生還（松田宏也）山と溪谷社 1983年1月20日 900円
 11. 手記：ミニャ・コンカからの生還（松田宏也・構成 徳丸壮也）「山と溪谷552号」1983年1月号
 12. ミニャ・コンガの生と死（編集部）「岩と雪90号」

13. 山一青春 菅原信・中谷武両君に捧げる 市川山岳会 ミニャコンガ登山隊 1984年 5月
14. 1982年 ミニャコンガ遭難の記録 市川山岳会 ミニャコンガ登山隊 1984年 5月
- 2) スークーニャン (Siguniang) 6,250 m
 1. 四姑娘山1981 同志社大学体育山岳部 1982年10月24日
 2. 壮士征姑娘羅姑娘愛壮士 鋭峰・四姑娘山の初登頂 (川田哲二) 「岳人412号」1981年10月号
 3. 四姑娘山・やさしい乙女 (羅仕明) 「月刊人民中国」1982年7月号
 4. 中国四川省・四姑娘山群のビッグ・ウォールを攀る (エリック・パールマン) 「岩と雪106号」
 5. 四姑娘山の旅 (角田不二) 「ヒマラヤ145号」1983年12月号
 6. 四姑娘山の自然 (山岸喬) 「ヒマラヤ150 & 151号」1984年5 & 6月号
 7. 四姑娘山の山旅 「ヒマラヤ153号」1984年8月号
 8. スークーニャンの山旅 (小林英見) 「ヒマラヤ157 & 158号」1984年12 & 1985年1月号
- 3) ミンジャン
 1. 岷山の秋・1983 中国ナムチャ・パルワ登山隊強化合宿の記 (角田不二) 「ヒマラヤ148号」
- 4) ユイロン (Yulong) 5,596 m
 1. 雲南の山旅ー遥かな頂ー 「ヒマラヤ153号」1984年8月号
 2. 玉龍雪山 (飛田和夫) 「山と溪谷579号」1984年10月号

(青海省・甘肅省地区)

- 1) アムネマチン (Anemaqin) 6,282 m
 1. アムネマチン初登頂 (上越山岳協会) ベースボールマガジン社 1982年1月30日 2,400円
 2. アムネマチン・写真集 (上越山岳協会) ベースボールマガジン社 1981年12月15日 4,000円
 3. アムネマチン峰・大いなる神 (張祥) 「月刊人民中国」1982年10月号
 4. 上越山岳協会アムネマチン登山隊の記録「山

- と溪谷532号」1981年9月号
5. アムネマチン主峰初登頂 (1981年5月の記録) 「岳人411号」1981年9月号
6. アムネマチンⅡ峰登頂の記録 (日中合同登山技術研究会実行委員会) 「岳人450号」1984年12月号
7. ザイルでつなぐ日本と中国 (酒井国光) 「岳人450号」1984年12月号
8. 友好の阿尼瑪 (第四次日中合同登山技術研修隊) 1985年7月29日
- 2) 黄河源流周辺
 1. 母なる黄河の源流を訪れる「ヒマラヤ163号」1985年6月号
 2. 黄河源流探検報告「ヒマラヤ167号」1985年10月号
 3. 中国青藏高原に黄河源流を探る (八木原罔明) 「溪人461号」1985年11月号
 4. 黄河源流を探る 読売新聞社 昭和60年11月13日 1,300円
 5. 黄河万里行 中国・水利部黄河水利委員会「恒文社」1984年6月15日
 6. 概念図も写真もない中国中央部黄河源流域 (Topics) 「山と溪谷594号」1985年9月号
- 3) 長江源流周辺
 1. 青蔵No.1 青蔵高原登山研究会 1984年4月27日
 2. 青蔵No.2 青蔵高原登山研究会 1985年6月20日
 3. 長江万里行 長江万里行編集グループ「恒文社」1984年5月15日 1,900円
 4. 長江ー源流から河口までー外交出版社1980年
- 4) 青蔵公路周辺
 1. 雲上の道・青海〜ネパール初縦断「ヒマラヤ167号」1985年10月号
 2. チベット青藏高原に見た人・河・寺そして山 (中江啓介 / 大石英代) 「岳人462号」1985年12月号
- 5) 祁連山脈周辺
 1. 「祁連山脈遠行」 (柳木昭信 / 神永幹雄) 「山と溪谷597号」1985年11月号

(新疆ウイグル地区)

- 1) チョゴリ (Qogir) 8,611m&クラウン (The Crown) 7,295m
 - 1.喬戈里 登頂記 (中国側北稜ルート征服の全記録) 日本山岳協会 / NHK取材班 日本放送出版協会 昭和57年12月20日 1,600円
 - 2.挑戦の記録・チョゴリへの道 (世界第二峰に中国側から無酸素で初登頂) 朝日新聞社 昭和57年12月20日 1,500円
 - 3.チョギル峰・カラコルムの主峰 (尚子平) 「月刊 人民中国」1983年3月号
 - 4.喬戈里峯 (K2) 偵察行 (原田達也) 「山岳第77年」日本山岳会 1982年12月1日 2,500円
 - 5.喬戈里峯 (K2 北面・地図の空白部を探る) 原田達也 「岳人415号」1982年1月号
 - 6.K2 北稜偵察記 (坂下直枝) 「岩と雪86号」
 - 7.遥かなる喬戈リの頂に 「日本山岳協会喬戈里峰 (K2) 偵察隊」 (小西政継) 「山と溪谷536号」1982年1月号
 - 8.喬戈里峰 (K2) 登山の展望 (小西政継登攀隊長らに聞く) 編集部 「岳人415号」1982年1月号
 - 9.山は晴天 (小西政継) 中央公論社 昭和57年4月10日 1,300円
 - 10.登頂手記: 「チョゴリへの長い道」 (吉野寛) 「山と溪谷550号」1982年11月号
 - 11.チョゴリ (K2) 北稜無酸素初登攀成る (川村晴一) 「山と溪谷550号」1982年11月号
 - 12.悔いなき登山の展開を (喬戈里峰の未踏の北稜登攀をめざして) 新貝勲 「岳人418号」1982年4月号
 - 13.チョゴリ峰登山の光と影 (登頂隊員に聞く) 編集部 「岳人425号」1982年11月号
 - 14.チョゴリ峰遠征をめぐる (水野勉) 「ヒマラヤ132号」1982年11月号
 - 15.タクラマカンの彼方・チョゴリへの旅 (佐々木慶正) 「ヒマラヤ131号」1982年10月号
 - 16.砂漠と氷雪の彼方に (チョゴリ登頂の全記録) 小西政継 山と溪谷社 1983年9月1日 1,200円
 - 17.果てしなき山行 (尾崎隆) 中央公論社 昭和58年7月20日 1,200円
 - 18.喬戈里峰北稜 (高見和成) 「山岳第78年」日本山岳会 1983年12月1日
 - 19.日山協、とんだ遭難さわぎ (佐瀬稔) 「岳人446号」1984年8月号
 - 20.日山協チョゴリ峰登山隊の不祥事を超えて (小西政継) 「山と溪谷579号」1984年10月号
 - 21.食い物にされた登山隊 (編集部) 「岩と雪104号」
 - 22.稜線・追悼吉野寛 (吉野あつ子) 1985年10月
 - 23.天の匂い・柳沢幸弘遺稿集 (登攀クラブ蒼水 / 早大岳友会) 1984年8月
 - 24.皇冠峰の頂をめざして 「ヒマラヤ164号」1985年7月号
 - 25.砂漠の果ての遥かな項 「ヒマラヤ171号」1986年2月号
 - 26.クラウン (館野秀夫) 「岳人463号」1986年1月号
- 2) コングール (Kongur) 7,719m&コングール・チュベエ (Kongur Tiubie) 7,595m
 - 1.日本コングール登山隊1980 (先遣隊報告書) 京都カラコルムクラブ
 - 2.コングール峰・巨大な屏風 (劉大義) 「月刊 人民中国」1982年12月号
 - 3.登山・それは愛 (塚本圭一) 東京新聞出版局 1981年4月15日 1,200円
 - 4.ザイルの二人 (満則・秋子の青春登攀記) 山と溪谷社 1983年1月10日 980円
 - 5.コングール7,719mの光と影 (池田常道) 「岩と雪85号」
 - 6.コングール峰北稜での“死” (寺西洋治・嶋満則・松見新衛) 塚本圭一 「岳人413号」1981年11月号
 - 7.コングール峰初登頂 ('81・7 アルパインスタイルによる英国隊の成果) 編集部 「岳人412号」1981年10月号
 - 8.コングール私記 (アラン・ラウス) 「岩と雪89号」
 - 9.コングル・チュビエ峰登頂 (木村清順) 「山岳第77年」日本山岳会 1982年12月1日
 - 10.コングールチュウビエ峰・キルギスの白い帽子 (袁揚) 「月刊 人民中国」1983年2月号

3) ムスターグ・アタ (Muztagata) 7,546 m

- 1.シルクロードの白き神へ スビダーニエ同人
- 2.シルクロードの白き神(ムスターグ・アタの登頂81・8) 崑崙登攀川崎市教育隊「岳人413号」1981年11月号
- 3.ムスターグ・アタ北峰(坂原忠清)「山岳第77年」日本山岳会 1982年12月1日
- 4.ムスターグ・アタ峰:氷山の父(陳栄昌)「月刊 人民中国」1982年9月号
- 5.アメリカ隊と挑んだ7,000m峰山スキー遠征記(笹山博夫)「山と溪谷601号」1986年2月号

4) 崑崙 周 辺

- 1.ウルグ・ムズターグの謎と正体(水野勉)「岳人444号」1984年6月号
- 2.西域秘話(上・下) 測量士ジョーンソンの生涯「ヒマラヤの三角測量」(金子民雄)「岳人444 & 445号」1984年6 & 7月号
- 3.万山の祖、崑崙の頂へ「ヒマラヤ165号」1985年8月号
- 4.遥かなる崑崙の頂「ヒマラヤ169号」1985年12月号
- 5.崑崙に咲いた日中友好の花(日中婦人友好登山隊)「岳人461号」1985年11月号
- 6.開かれた万山の祖「崑崙山脈」(森美枝子/釣部恵子)「山と溪谷598号」1985年12月号

5) ボゴダ (Bogda) 5,445 m

- 1.中国・天山山脈処女峰 ボゴダ 京都山岳会 1981年12月1日
- 2.天山山脈 博格達峰(国鉄岳連中国親善登山報告) 国鉄山岳連盟 昭和57年4月20日
- 3.日本山岳会学生部ボゴダ峰登山隊1981年の報告 日本山岳会学生部ボゴダ登山隊
- 4.天山の詩(ボゴダⅢ峰初登頂報告書) 天山会登山隊・トレッキング隊
- 5.天山への夢遙か(中国遠征特集号) もんたにゅう会
- 6.日本山岳会学生部ボゴダ山登山隊1982年の報告 日本山岳会学生部ボゴダ山登山隊
- 7.ボゴダ峰・天池を抱く山(王振華)「月刊 人民中国」1982年8月号
- 8.ボゴダ山群1981年(鹿野勝彦)「山岳第77年」

日本山岳会 1982年12月1日 3,500円

- 9.天山山脈ボゴダ峰(5,445m)周辺の自然について(2,3のメモ) 名越昭男「山岳第77年」
- 10.地名と地図と標高について(折込地図解説) 児玉茂「山岳第77年」
- 11.ボゴダ山群の鳥(その鳥相についての案内) 児玉茂「山岳第77年」
- 12.ボゴダ主峰初登頂(1981年5～6月の記録) 京都山岳会ボゴダ登山隊「岳人411号」1981年9月号
- 13.京都山岳会ボゴダ峰登山隊の記録(梶原達男)
- 14.ボゴダⅢ峰の初登頂(81・8日本天山会登山隊による全員登頂) 編集部「岳人412号」1981年10月号
- 15.ボゴダ山群ひとめぐり・JAC学生部登山隊(増島達夫)「山と溪谷538号」1982年3月号
- 16.高校生の海外遠征(座談会:ボゴダ峰とツイズ峰登山)「岳人425号」1982年11月号
- 17.熱意あふれる技術研修(ボゴダ山麓の日中登山研修に参加して) 中村正勝「岳人426号」1982年12月号
- 18.ボゴダをめざして 動霧山岳会 昭和58年5月1日
- 19.登山と自然観察(川澄隆明)「岳人433 & 434号」1983年7 & 8月号
- 20.ボゴダ山群の植生について(奥田尚志)「山岳第78年」日本山岳会 1983年12月1日 3,500円
- 21.ボゴダⅡ峰の南面の地学的知見(川澄隆明)「山岳第78年」
- 22.ボゴダ西峰と中央峰を踏破(JAC学生部)「岳人452号」1985年2月号
- 23.天馬の里(鈴木重彦/大野紀和)「岳人452号」

(そ の 他)

- 1.中国の高峰 中国登山協会監修 東京新聞出版局 昭和56年1月29日 2,000円
- 2.中国登山ハンドブック(未知、秘境、未踏の山総ガイド) 上越山岳協会 ベースボールマガジン社 1981年 1,800円

- 3.中国の山へのアプローチ（阿部淳）「ヒマラヤ104号」1980年6月号
- 4.世界のアルピニストがねらう中国の山々（王鳳桐）「月刊 人民中国」1982年5月号
- 5.開かれた中国の高峰「岳人400号」1980年10月号
- 6.中国登山レギュレーション全文対訳「岩と雪75号」
- 7.中国にくる外国の登山団体・登山旅行団の費用徴収についての規則「岳人409号」1981年7月号
- 8.未踏の山・辺境の山 第4回：クラウン（カラコルム）藤大路美興「岳人407号」1981年5月号
- 9.未踏の山・辺境の山 第5回：カイラス（チベット）加藤洋「岳人409号」1981年7月号
- 10.進む中国奥地の山岳研究（渡辺義一郎）「岳人415号」1982年1月号
- 11.チベット南東部の氷河（鄭本興）「岩と雪80号」
- 12.中国の氷河と気象の特性（天山での中、日合同調査に参加して）上田豊「岳人415号」1982年1月号
- 13.新疆・ウイグルの印象（チョゴリ峰登山隊顧問団訪中に参加して）広島三朗「岳人422号」1982年8月号
- 14.東チベット紀行（ドウオグ村の人とその暮し）江本嘉伸「山と溪谷560号」1983年7月号
- 15.中国登山協会一行来日「岩と雪98号」
- 16.これからの中国登山「ヒマラヤ142号」1983年9月号
- 17.中国登山研究「ヒマラヤ142号」
- 18.チベットおよびその付近の山々（フランク・ブースマン / 水野勉・訳）「山岳第78年」日本山岳会 1983年12月1日 3,500円
- 19.ルンタの秘境（江本嘉伸）光文社 1984年4月30日 980円
- 20.中国横断山脈東南縁部踏査紀行（松本健夫）「山岳第79年」1984年12月1日 3,500円
- 21.西藏・聖地カイラス巡礼（NHK取材班）日本放送出版協会 昭和60年6月1日 1,700円
- 22.中国大陸・下巻 天壤無限（白川義員）小学館 28,000円
- 23.氷山雪嶺二千年（周正）譚佐強 / 田川常雄・訳 ベースボールマガジン社 1985年3月10日 2,200円
- 24.雲南・少数民族の天地（NHK取材班）日本放送出版協会 昭和60年2月20日 1,600円
- 25.夢街道「天山南路」東西文明の交路、烏魯木齊から喀什まで（田島正）「山と溪谷594号」1985年9月号
- 26.天上の道—憧憬のラサヘ（トーマス・レイヤー）「山と溪谷597号」1985年11月号
- 27.中国西域紀行（風見武秀）「岳人460号」1985年10月号
- 28.初のヒマラヤ横断 1,000km（山里寿男）「岳人461号」1985年11月号
- 29.天山シルクロード（成一他 / 鈴木常良他訳）恒文社 1984年12月30日 2,500円
- 30.ヒマラヤの高峰5 中国・パミール（深田久弥）白水社 1983年8月25日 1,700円
- 31.チベット研究文献目録「日本文・中国文篇」1887年～1977年（貞兼綾子編）亜細亜大学アジア研究所 昭和57年4月10日 6,500円
- 32.ヒマラヤ文献目録（薬師義美編）白水社 1984年1月25日 19,000円

※以上の文献は、比較的入手し易いものをまとめてみました。

— 事務局から —

会費納入のお願い

本会の年会費は前納制となっております。昭和61年度分の年会費を速かに納入下さいますようお願い致します。

尚、6月30日までに納入されない場合は、「ヒマラヤ」に「前金切れ」の表示をして督促しますが、それでも納入されない場合は、会費が納入されるまでヒマラヤの発送を停止します。

年 会 費 6,000円

※終身会費制度もあります。詳細は事務局迄。

■ 寸 感 ■

「植村直己物語」の試写会に行ってきた。この作品の制作に当って、佐藤純彌監督は、植村氏の偉大な足跡を汚すことにならぬよう極力現地での撮影を心がけたと云われる。確かに迫力あるシーンの続く映画であった。また、現地ロケの裏方さんとして協力した多くの知人がエキストラとして登場するのも楽しい。

倍償千恵子の演ずる公子夫人の「こんな生活いつ迄続くのよ!」は、身につまされる問題として耳に残った。

6月7日より封切りされる。この2時間20分の大作を是非観賞されることをお勧めします。

事務局日誌(4月)

2日(水) ギャラベリ、チョー・ウィ、雪宝頂3隊打合わせ(飛田、八嶋、中岡、山森)

5日(土)～6日(日) 北海道第1回Exp. 研究会(札幌・山森、山田)

6日(日) 故佐久間隆家往訪(山森、山田)
9日(水) 事務局打合わせ(稲田、山森)
14日(月) ヒマラヤNo.174 発送
雪宝頂隊打合わせ
15日(火) キンナール隊打合わせ
17日(木) 常務理事会(遠藤、稲田、山森、八木原、飛田、尾形、吉田)
21日(月) 東京集会(15名)
27日(日) CMAと協議の為、遠藤副会長、山森事務局長訪中

ヒマラヤNo.175(6月号)

昭和61年5月10日印刷 61年6月1日発行

発行人 柴田 金之助

編集人 尾形 好雄

発行所 日本ヒマラヤ協会

〒160 東京都新宿区高田馬場3-23-1
淀橋食糧ビル506号

ヒマラヤへのステップ!

エクスペディション & トレッキング

ネパール、インド、パキスタン、

ソ連(中央アジア)へ遠征、

トレッキングを計画の皆様へ。

航空券から登山要請、現地手配、入国査証(ビザ)代介手続き、遠征隊・トレッキング用山岳保険加入に至るまで適切なトータルアドバイス、手配を受けられます。

ヒマラヤ以外にもヨーロッパアルプス、アフリカ、北・南・米etcの格安航空券、情報もあります。

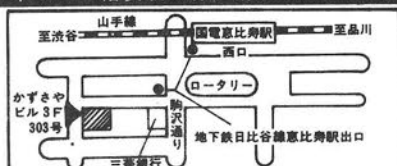
世界山岳旅行クラブ

運輸大臣登録旅行業代理店業第2809号
住友海上火災登山トレッキング保険代理店

(株)マウンテン・トリップ

〒150 東京都渋谷区恵比寿西1-8-1 かずさやビル3F 303号 ☎03-476-1200 担当 藤原

主催:株ロータリーエアサービス 〒105 東京都港区新橋2-2-4 ☎03-504-0111 担当:佐藤(一般登録第332号/取扱主任者・伊藤園子)



TREASURE TOUR

EXPEDITION & TREKKING

自分の旅だから、自分でつくる。そんなあなたを応援いたします。

—— 遠征隊、トレッキング、秘境への旅 ——

あらゆる申請・許可取得、現地手配、航空券、山岳保険など、
お客様のご要望に遠征経験豊富なスタッフがお答えします。



マウンテンラベル株式会社

〒105 東京都港区新橋3-26-3 会計ビル4F

☎03-574-8880

三井航空サービス代理店2452号

カラコルムの秀峰 ウルタル山

遥かなる高み

トレッキング・登山隊の許可取得から航空券・現地手配までお引き受けいたします。
～ネパール・インド・ブータン・パキスタン・東南アジア・アフリカ・南米～

トレッキング・海外登山
シルクロード・秘境旅行
のバイオニア



株式
会社

西遊旅行

東京本社 〒101 東京都千代田区神田神保町2-2 新世界ビル5階 ☎03(237)1391(代表)

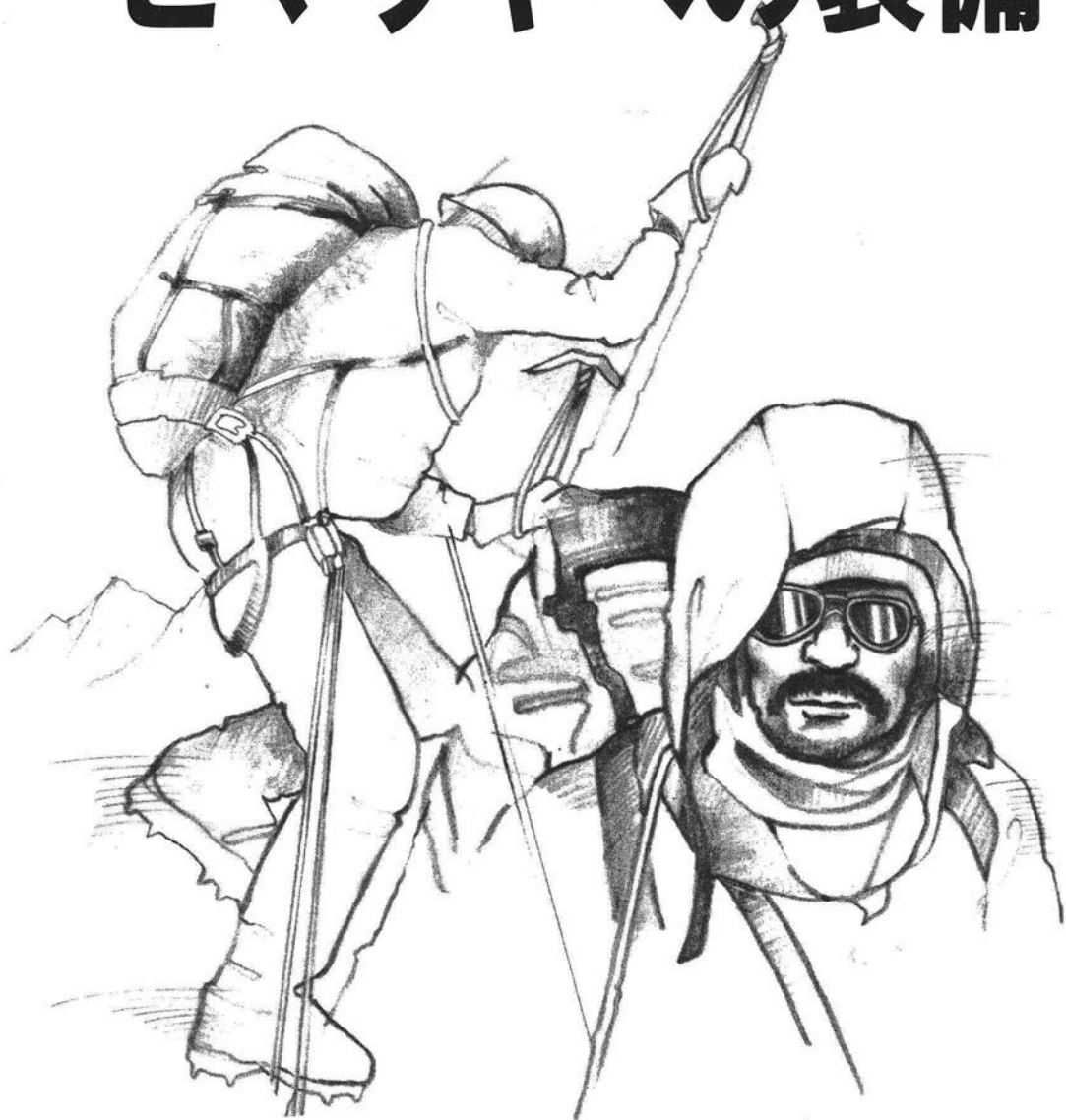
大阪営業所 〒541 大阪市東区平野町4-53-3 ニューライフ平野町202号室 ☎06(202)1391(代表)

カトマンズ営業所 JAI HIMAL TREKKING (P) Ltd. P. O. BOX 3017

KATHMANDU, NEPAL ☎216338

運輸大臣登録一般旅行業 607号

ヒマラヤへの装備



◎遠征隊の装備、相談にのります。



ICI 石井スポーツ

- 登山本店 / 〒160東京都新宿区百人町2丁目2番3号 ☎03(208)6601~3
- 大宮店 / 〒330埼玉県大宮市宮町2丁目123番地 ☎0486(41)5707
- 水道橋登山店 / 〒101東京都千代田区三崎町2丁目8番14号 ☎03(264)5575~6
- 神田登山店 / 〒101東京都千代田区神田神保町1丁目8番地 ☎03(295)0622
- 新宿西口店 / 〒160東京都新宿区新宿1丁目16番7号 ☎03(346)0301(代)
- 高崎店 / 〒370群馬県高崎市新町6番地 ☎0273(27)2397(代)
- 札幌登山店 / 〒060北海道札幌市中央区南二条西4丁目4番 ☎011(222)5305
- 新潟店 / 〒950新潟県新潟市東大通2丁目5番1号 ☎0252(43)6330
- 仙台店 / 〒980宮城県仙台市東八番丁107番地の36号 ☎0222(97)2442
- 町田ジョルナ店 / 〒194東京都町田市原町田6丁目6番地14号 ☎0427(26)6248(代)
- フーズショップ / 〒160東京都新宿区百人町2丁目2番43号 ☎03(232)1286
- 外商部 / 〒160東京都新宿区大久保2丁目19番10号 ☎03(200)7219
- 事務所 / 〒160東京都新宿区百人町1丁目4番15号 ☎03(200)1004